はじめに

「ことばはその人の中からその人の力で出てこなければ、力にならないのです。」

私は、かなりはやい時期から、ワークショップの手法を取り入れて、話し合いの方法を工夫したり、議論の仕方について意識して場づくりをしてきました。一九九一年の秋には、国際環境心理学シンポジウム スピリット・オブ・プレイス（場の精神）／仙台」という国際会議を仙台で開きました。アメリカからはネイティブアメリカンの人たちを、そして日本国内からも、宇宙物理学者から宗教家、環境活動家、自然農の実践者、アイヌの人など、さまざまな場所で環境と人間と精神にかかわる新しい取り組みをしている人々を招き、三日間にわたって三千人以上の人々が議論をしました。それらゲストの方々は、非暴力トレーニングやからだとこころのワークショップなど、一般的な話し合いの仕方やコミュニケーションの形とは少し違う集まり方と学びの方法を、それぞれ独自に実践してき

た人たちが中心で、当日の会議でもさまざまな場づくりの工夫をしました。

ワークショップというのは、このところ注目されてきていますが、もともと芸術やまちづくりの現場など、さまざまなところで使われてきた新しいコミュニケーションのあり方のことで、「作業場」「工房」「共同作業」という意味があります。まだこのことばを知らない人も少なくないでしょう。最近、私の古い友人でもある中野民夫さんによる『ワークショップ』という岩波新書がでて、はじめて簡便な入門書が出たところです。簡単にいうと、私たちが学校にいた時代に経験しているような、先生が一方的に学生や生徒に向かって、知識を伝達する学習の形ではなく、その場にいる人たちが、皆で議論や決定に参加できるように工夫した話し合いや学習の方法をいいます。また、私たちがかつて習った小学校の学級会のような、意見のあるもの、声の大きなものが議論を支配し、大部分の人たちは沈黙し、最後は多数決によって何かが決まっていくような方法ではなくーワークショップでは通常、多数決は行われないー、さまざまな形で参加した人が議論にかかわることが可能なしくみを持った場づくりの方法がワークショップであると私は考えています。この本では、私がかかわってきたさまざまな市民活動や教育の現場における場のあり

方を、いくつもの事例をあげて紹介することで、市民が自発的に社会とかかわる中から言葉を獲得し、社会との新しいかかわり方を構築していくことが、私たちが生きているこの国に今こそ必要であるということを明らかにできればいいと思っています。

この本で私がいいたいことは、「参加型」の議論の方法がもっと必要だということです。そこにあらゆる出発点があります。では、どうして参加型の議論のやり方が必要とされるようになり、旧来の学校の教室のようなコミュニケーションや会社での会議のかたちでは、行き詰まりが目立つようになったのでしょうか。

近代社会は、大雑把に言えば、声が大きく論理的で理性的な人間が議論の主導権を握る社会です。その結果私たちの社会は、つい最近まで、実質的に少数のリーダーが考え、判断して、その判断に多数の人々が従っていくというスタイルでした。その結果として、経済が成長し、アメリカと経済が並ぶようになり、さらにはバブル崩壊を迎えたわけです。さまざまなことがらについて、そのようなリーダーについていくことでものごとを進めていくという社会でした。そしてそれがうまくいっていると多くの人に思われた時代だった

のです。教室のような、先生が正しいことを話し、それを受けてただ理解するというコミュニケーションのスタイルは、そのような時代に適した形式として、多くの人たちに受け入れられてきました。決定するのは一部のリーダーで、それにしたがえばいいという時代。もしかするとそのリーダーは、日本の中ではなく欧米社会にあったのかもしれません。一部の偉い人のいう正しいことを理解することが何よりも尊重される社会です。

ところが現在では、そのスタイルではものごとがうまくいかなくなっていますし、そのことは多くの人が認めるところになりつつあります。正しい結論を誰かが持っているわけではないということに気がつきだしたのです。また、環境問題や地域の問題が社会の大きな課題として私たちの生活の中に立ち上がってきていますが、これは、誰かに正解を決めてもらえばすむような問題ではなくて、その地域に住む人々一人ひとりの問題になってきています。ですから、従来のようにリーダーが正しいことを決めたとしても、地域の人々が参加して納得しない限り、解決できないようになってきているのです。仮に役所が正しいことを決めたとしても、その結論が、多くの人たちに共有され、行動を共にしない限り実効性が生まれないのです。共有し、納得するためには、その議論のプロセス自体に、

人々がなんらかのかたちで参加していないと難しいことは言うまでもありません。

そもそも、役所の問題設定に悪意はないのかもしれませんが、結論を市民に押しつけるような方法は、無理がありますし、役所のことばはたいてい人々の生活のことばから外れていて伝わらないし、議論もできないようになっています。それを通じることばに変えていくような場づくりが必要になってきているのでしょう。地域に何か問題があったとして、それを行政にお願いするかたちで解決するという時代は終わったのです。

たとえば行政と市民の議論の仕方について考えてみましょう。一方の側に一列に住民が並んで座り、反対側に行政側が座って話し合いをするとした場合、どうなるでしょう。たいていの場合は、相手に向かって一方的に何かを述べたり、住民の側が要望を出しても、それに対してお役所のことばで、つまり生きていないことばで公式的な見解を返したりすることに終始するのではないでしょうか。もしそれを、対面のかたちではなく、行政と住民が交互に座って、車座になり、さらには和室で、畳の上に座って話してみたら、少しは双方の意識が変わるのではないかと思うのです。住民も要望を叫ぶのではなく、行政もたんに反論するのではなく、お互いに生きた対話が交わせるようになる、そんな可能性が他

にもあるのではないでしょうか。

座り方をかえるだけで、コミュニケーションの質が変わることがあります。そして、そのことは、われわれ自身がものごとの当事者になって、他人事ではなくその問題にコミットしながら考えと議論を進めていく方法につながっています。参加型のコミュニケーションとは、単に発言する権利を平等にするということだけではなく、当事者性の獲得ということなのです。そして一方的に誰かが決めるのではなく、人々が参加しながら決めていくというコミュニケーション・スタイルの提案のひとつが、ワークショップと呼ばれるものです。

いままでの議論の仕方では、声の小さい人の意見はなかなか表面に出てきにくかったと思います。声の大きさとその指摘の重要さには関係がないのです。論理的に説明できなくても、他の人が気がついていない重要なポイントに気がつく人もいます。もしかしたら、議論の前提自体を、問い直すような重大な問いかけが、そんな小さな声に含まれているのかもしれないのです。ところが、実際の議論の場ではどうでしょうか。多くの会議で、いつも話す人だけが話し、議論の内容も深められないままに、決まりきったやり方で予定さ

れた結論で終わっている場合が少なくないのではないでしょうか。

私が、岩手県で行ったあるワークショップで、模造紙とカラーマーカーをつかって、テーマに関係するトピックをそれぞれが勝手に見つけて書き込んでいき、別の参加者が連想するものを線でつないで書き込んでいくという方法を使ったことがありました。これは、最初から、優先順位を決めたり、項目間の関連を想定した上で、トピックをだしていくのではなくて、どんな人でも意見を出せる方法として紹介したのです。参加していた年配の男性が、その晩さっそく地元で地域の問題を考えようという集まりで、ありあわせの広告紙の裏でそれをやってみたところ、普段、発言してほしいといっても、なかなか発言しない人も、どんどん書き込んでくれて、新鮮な意見がたくさん出たし、大きな紙一枚に書き込みが終わった時には、それまでにない充実感で、今後の方針も出て、会も盛り上がったということを報告してくれました。こんなふうに、会議で、ただ何か意見はありませんかと聞くだけではなく、ちょっとした工夫をしてみることで、発言をしそびれている人から、いくつもの貴重な意見がでてくるものなのです。

単なる形式的な手続きとして、いつも発言する声の大きい人だけが話して、最後に多数

決を取るとういうような方法では、議論は深まりません。また発言できなかった人は、その場に参加したという気がしないので、決定にも共感したり、責任をもって担おうという気持ちにならないのです。

これから私たちに起きてくる問題は、自分たちの住んでいる町の学校のいじめのことであったり、近くの川の汚れのことであったり、空洞化しかかっている地域の商店街のことであったり、ポイ捨てのごみの問題であったりと、誰かに解決してもらうのではなく、自分たちも当事者として関わっていくことがらである場合がますます多くなります。そこにはどうしても参加型の議論の方法、場のつくり方、そのための技術やツール、そして経験がどうしても必要になってきます。新しいこれからのコミュニケーションのあり方が求められているのです。

さて、私がどうしてこのようなことを継続的に考えるようになったかを振り返ってみると、私自身のコミュニケーションのやり方にとても欠点があったからなのだと思います。私は、三〇代の前半までは、どちらかというと議論の場を一方的に仕切ってしまう方でし

た。ひどいときには、相手の発言の途中でさえぎって、相手のいいたいことを先回りして説明してしまい、反発を受けていたのです。たしかにその人のいいたいことを理解してはいたのでしょうが、その人は気分を害し、結局、一緒に何かをしていくということが困難になることもありました。そんなコミュニケーションのやり方は、結局は、ダメなんだということに気がついて、場づくりということを考えはじめたのです。ことばはその人の中からその人の力で出てこなければ、力にならないのです。

どうしたら、私が一人で仕切ってしまうのではなく、共に議論していけるかということを考えている頃に、仙台・宮城の市民活動団体のガイドブック『センダードマップ』を、私よりもかなり若い人々と共同作業でつくるという経験を持ったのです。すべて私が仕切るのではなく、それぞれ分担を決めて任せてやってしまうというプロジェクトのやり方をとったのですが、そのときに、そうか、全部を仕切らなくてもできるし、そういうやり方は心地よいものなんだなと身体で実感したことが大きな収穫になり、その後の私のコミュニケーションや組織のつくり方の方向性を決めたのです。

さらにディープエコロジーという考え方を日本に紹介する運動にかかわりができ、その

中で、最初にも触れたようにネイティブアメリカンの人を呼んだ一九九一年のシンポジウムで、数百人が車座になって話し合いをするという経験をもちました。そのころには、国内でもあちこちにそれまでとは違ったコミュニケーションのやり方を模索する動きがあり、先進的な人たちを招いて、いろいろなタイプのワークショップを同時並行的に開催したのがそのシンポジウムでした。

たぶん、新しい市民社会を作るための提案を行うと同時に、運動や組織の内部で、そして異質な他者との対話の中で、新しいコミュニケーションの方法を生み出す必要があるとそのころから感じていたのだと思います。たとえば、私が関わっている東北ＨＩＶコミュニケーションズというエイズ問題に取り組むＮＰＯ（民間非営利組織）では、以前から、ボランティアスタッフのワークショップのかたちで会合や研修を開いていて、その時々の経験の中で互いにたくさんのことを学んできました。私一人のアイディアだけではなく、そうした開かれた議論の中で、意外な人から意外なアイディアが生み出されていく驚きが必ずあります。その場合、私も主宰者でもあったけれども、その場によって私自身も学んできたということです。

さらに、ここ数年は、特定非営利活動法人せんだい・みやぎＮＰＯセンターという中間支援組織を立ち上げ、各地のＮＰＯをサポートする仕事をしています。組織のマネジメントやＮＰＯがかかえるさまざまな問題を解決するための研修の中で、いろいろなワークショップを行ってきました。その中で学び、発見したこともあります。

コミュニケーションの問題を解決することは、人と人、人と組織などの社会の問題を根底から変えていくということです。私たちが日常話していることば、普段のコミュニケーションを作り変えていきたい、私たちが話しているこの日本語というものを、もっと力強い市民のものにとりかえしたいという願いを持って本書を書きました。この本が、新しいコミュニケーションのための場づくりに役に立つことを祈っています。